

明日へつながる 今日の一歩

夢

希望

目標



私たちは、心の底に不安が潜^{ひそ}んでいたとしても、これを日々の「小さな満足」で覆^{おお}い隠^{かく}して、やり過^すごそうとしてしまうこともあるのではないのでしょうか。

今回は、ある青年の体験を通して、しっかりと人生を歩いていくうえで大切なことについて、ご一^{いっしょ}緒^{しょ}に考えてみましょう。

「気楽な生活」に満足？

清水隆一^{しみずりゅういち}さん（25歳）は、現^{げん}在^{ざい}、都内のファミリールレストランで週五日ほど、アルバイトをしています。

「店長、お先に失礼します」

「お疲れ様^{つかれさま}。隆一君、明日はお休みだったよね」



「はい、休みです」

「雨は上がったみたいだけど、気をつけて帰ってね」

その日、隆一さんが仕事を終えて店を出たのは夜の十一時過ぎ。帰り道ではコンビニエンスストアに立ち寄り、夜食と翌朝の朝食を選びます。

「これがいつもの楽しみ。さて、何を食べようかな……」

隆一さんは大学進学を機に上京して以来、ずっと一人暮らしをしています。

学生時代から、人と接する仕事に興味を持っていた隆一さん。卒業後は機械部品のメーカーで営業職に就きましたが、自分が想像した以上に厳しい仕事だったため、一年ほどで辞めてしまいました。

一時は再就職をめざしたものの、希望する企業の内定はなかなか得られず、結局「次の仕事が決まるまで」と思ってから始めたレストランでのアルバイトに落ち着く形となったのです。

このアルバイト生活も、もう二年になります。正社員として働いていた時代に比べれば、収入は多くありません。それでも毎日の生活費に困るほどではなく、特に贅沢をしたいたとも思わない隆一さんにとって、今の暮らしはそれなりに満足 of いくものでした。

「何より、気楽なところがいいよ」

急な受注やクレームに休日を返上して対応することもあった正社員時代を振り返ると、そんなふうにも思っていた。

募る不安

買い物を終えた隆一さんが、自宅のアパート近くの交差点で、歩道橋を渡っていたときのことです。

「あつ！」

雨上がりで階段が濡れていたことが災いしたのか、あと数段というところで足を滑らせ、転んでしまいました。

「痛いっ！」

どうやら足首を捻挫したようです。痛みはありましたが、なんとかアパートにたどり着き、その日はすぐに床に就きました。

ところが早朝、強い痛みで目が覚めました。足首を見ると、大きく腫れ上がっています。やっとの思いで近くの病院で診察を受けたものの、松葉杖がなければ歩くこともままならない状態になっていました。

「ああ、ついていないなあ。あのとき、滑りさえしなければ……」

こうなつては、アルバイトもしばらく休まなくてはなりません。店への連絡を済ませた隆一さんは、せつかくの休日を一人、部屋の中で過ごすことになりました。すると、これまでにない不安が襲ってきます。

「来月の家賃や電気代なんかも、ちゃんと払えるかな……」



母親への電話

急に心細くなってきた隆一さんの脳裏のうりに、長野県に住む両親の顔が浮かび、電話をかけてみることにしました。

「もしもし、母さん？ 隆一だけど」

「隆一、元気になっているの？ 携帯けいたいに電話しても出ないし……。前に送ったお米はまだあるの？ 荷物が届とどいたときぐらい電話しなさい」

ふだんはこんな調子で心配されるのも煩わづらわしく思えて、なかなか連絡を取ろうとしない隆一さんですが、この日は久ひさしぶりに聞く母親の声に、少しほつとした

気持ちになっっていました。

「ごめん、ごめん。ちよつと忙いそがしかったからさ。それが昨日の夜、階段で転んで足を捻挫ねんそしちゃって……」

「えっ！ 大丈夫だいじょうぶなの？」

「大丈夫、大丈夫だよ。さつき病院にも行ってきたから、心配ないよ。仕事はしばらく休むけど、食事は近くにコンビニもあるし」

「隆一、あんまり無理するんじゃないよ。それに、ちゃんと栄養のバランスをとって食べるのよ」

「分かってるよ」

電話では気丈きじょうに振ふ舞まったものの、いざお弁当べんとうを買いに行くとなると、ひと苦勞くろうです。近いと思っていたコンビニエンス



ストアも、松葉杖では遠く感じられま
す。なんとか買物物を済ませてアパート
まで戻ると、一人きりの部屋の中で、さ
まざまな思いが浮かんで消えていきま
した。

“今の生活はそれなりに楽しいし、何不
自由なく暮らせるのは当たり前だと思っ
ていた。でも、けがが治るまでは収入も
ないし……。この先、もっと長く仕事を
休まなければならぬようなことがあつ
たら、どうなるんだろう”

これまでそうした現実を直視すること
を避けて、漫然と日々を過ごしていたこ
とに気づかされた隆一さんは、初めて自
分の将来というものに思いを馳せてみた
のでした。

突然の来訪者

「ピンポーン」

翌日の午後のことです。アルバイトを休んだ隆一さんの部屋に、チャイムの音が鳴り響きました。

「平日の昼間なのに、誰だろう。友だちもみんな仕事のはずだし」

不思議に思いながらドアを開けると、そこには母親が立っていました。手には食材がたくさん入ったスーパーの買い物袋を提げています。

「母さん！ 大丈夫だって言ったのに」

「隆一が大変なときに、放っておけない



でしよう」

そう言うのと、話もそこそこに、台所で夕食の準備を始めました。

「健康のもとは食事よ。ちゃんと栄養の

あるものを食べないと」

しばらくして、食卓には温かい手料理が並びました。隆一さんは少し照れくさいような気持ちになりながらも、料理を口にするると、懐かしい味に安心感を覚えたのでした。

そのとき、隆一さんはふと父親のことを思いました。

「父さんは元気？」

「うん、今日も仕事に行ってるよ。ふだんはあまり口に出さないけれど、お父さんも本当はあなたのことを心配しているのよ。そうそう、隆一に伝えておけって」

「何を？」

「お父さんも隆一くらいの年のころに、仕事のことで悩んで転職を考えたりもし

たんだって。でも、二十代は人生の土台を築く時期だから、なんでもいいから一生懸命に努力することが大事だぞって。

何をやっても無駄なことはないし、遠回りになってもいいから、年を取ってから後悔しないように、自分の人生に責任を持ってしっかりやってほしいって言っていたわよ」

いつもの隆一さんだったら、こうした話も聞き流してしまっていたかもしれない。ところがこの日は、なぜかその言葉がスツと心に染み込んできました。

「母さん、わざわざ来てくれて、ありがとう」

そんなお礼の言葉も、素直に口にすることができたのでした。

たった一度しかない人生を……

隆一さんのけがは二週間ほどでよくなり、今では元気にアルバイトに励んでいます。

ある日の休憩時間に、店長から思わぬ言葉をかけられました。

「隆一君、けがをしてから表情が変わったね」

「そうですか？」

「それに、前より仕事に対する真剣さが伝わってくるよ」

「それはうれしいです」

隆一さんは、けがをしてから考えたこ

と、母親が来てくれたこと、そして父親の言葉について話しました。

「そうか、いいご両親だねえ。何をやっても無駄なことはない、年を取ってから後悔しないように、か……。そういえば高校時代の担任の先生からも、同じような言葉を聞いた覚えがあるな」

「どんな言葉ですか？」

店長が恩師から教わったという言葉は、「たったひとりしかない自分を、たった一度しかない人生を、ほんとうに生かさなかつたら、人間、生まれてきたかい

がないじゃないか」という、山本有三やまもとゆうぞうの『路傍の石』の一節でした。そして店長は隆一さんに、小声でこんな話を聞かせてくれたのです。

「実はぼくも、いずれは自分で会社を起こしたいって思っているんだ」

「店長には大きな夢があるんですね。ぼくはまだ、将来のこととか全然考えられなくて……」

隆一さんには、夢を持っている店長が、とても輝かがやいて見えました。すると店長は、隆一さんを元気づけるように言いました。

「夢がないなら、まずは今やっている仕事を究きわめてみるのもいいんじゃないかな。例えば『日本一の接客をめざす』と

か。……なんてね」

「日本一、ですか……」

半分冗談じょうだんめかしたような店長の言葉ですが、今の隆一さんには、決して軽い言葉には思えませんでした。





心に芽生えた「夢」

“よし、どこまでできるかは分からないけれど、『日本一の接客』に挑戦してみようかな”

そう考えた隆一さんの目に留まったものは、アルバイト先のファミリールストランを運営する会社の、正社員募集のポスターでした。ずっと従業員用の通路に掲示されていたものですが、これまでは自分自身の意識が向いていなかったのです。

“……そうだ。もつとしつかり仕事と向き合っていくためにも、正社員に応募し

てみよう”

隆一さんの心には、そんな気持ちも芽生えてきたのでした。

*

けがをしてからの日々を振り返ってみると、隆一さんの仕事や人生に対する意識は、ずいぶん変わってきたように思えます。表面上は、まだ何一つ変わっていないように見えるかもしれませんが、隆一さんはひと皮むけて、ほんの少し成長したようです。